

HIGASHIHIE

東比恵三丁目遺跡2

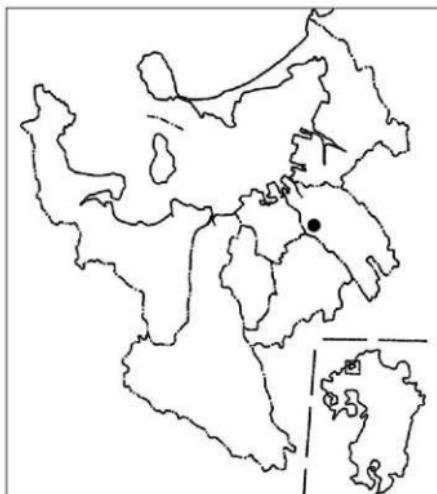
－東比恵三丁目遺跡第2次調査報告－

2009

福岡市教育委員会

HIGASHIHIE
東比恵三丁目遺跡2

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第1051集—



調査番号 0713
遺跡略号 HGH-2

2009

福岡市教育委員会



1. 1区 水田(南西から)



2. 1区 大畦畔土留(南から)



3. 1区 護岸杭列(東から)



4. 1区 護岸(東から)



5. 1区 護岸葦敷物(南東から)

序

現在、九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は増加の一途をたどっており、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、博多区東比恵3丁目において発掘調査を実施した東比恵三丁目遺跡第2次調査の記録を収録したものです。

調査の結果、平安時代の護岸と水田が確認され、この地で自然の猛威と闘いながら水田を開き、守ってきた平安人の活躍を彷彿とさせる良好な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました福岡地所株式会社には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が文化財に対する認識と理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成21年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　言

1. 本書は福岡地所株式会社が実施した博多区東比恵3丁目1番地他地内において商業ビル開発にともなう事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財1課が平成19年度に実施した東比恵3丁目遺跡第2次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は旧国土座標第2系による座標北で、磁北はこれに6°10' 西偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の5m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
4. 遺構の呼称は略号化し、不定形土壙→SX・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は加藤良彦による。
6. 本書に使用した遺物実測図は加藤・平川敬治・井上加代子・米倉法子による。
7. 製図は井上加代子・嗣田則子による。
8. 本書に用いた写真は加藤による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II.	調査区の立地と環境	2
III.	調査の記録	7
1.	調査の概要	7
2.	基本層位	10
3.	1区の調査	11
4.	2区の調査	27
IV.	小結	28

挿図目次

Fig.1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig.2	調査区位置図 (1/2,000)	4
Fig.3	調査区周辺測量図 (1/800)	5
Fig.4	1・2区上面遺構全体図 (1/200)	6
Fig.5	1・2区土層断面図 (1/100)	9
Fig.6	1区縄文・弥生時代遺物実測図 (1/3)	12
Fig.7	1区古墳時代・古代遺物実測図 (1/3・20=1/2)	13
Fig.8	1区上層 (SD01) 出土遺物実測図 (1/3・27=1/8)	15
Fig.9	1区上面水田実測図 (1/60)	16
Fig.10	1区下面遺構全体図 (1/200)	17
Fig.11	1区大畦畔実測図 (1/40)	18
Fig.12	1区b・c層出土遺物実測図 (1/3・40=1/4・39=1/16・41=1/8)	19
Fig.13	1区護岸実測図 (1/60)	21
Fig.14	2区出土遺物実測図 (1/3・49=1/8)	27
Fig.15	下月限C遺跡7次調査護岸SX773 (1/60)	28

写真目次

Ph.1	調査区周辺（1次調査区・南西から）	7
Ph.2	1区上面全景（南西から）	8
Ph.3	1-1~3区上面遺構全景（南西から）	8
Ph.4	1-1~3区上面遺構全景（北西から）	8
Ph.5	2区上面遠景（南から）	8
Ph.6	2区上面全景（南西から）	8
Ph.7	1トレンチ東壁土層断面（西から）	10
Ph.8	3トレンチ東壁土層断面（南から）	10
Ph.9	5トレンチ（南から）	10
Ph.10	2区土層断面（南から）	10
Ph.11	1区弥生時代遺物	11
Ph.12	1区古墳時代遺物	13
Ph.13	1区洪水砂面（SD01・南西から）	14
Ph.14	1区上層（SD01）出土遺物	15
Ph.15	1区水田面（南東から）	17
Ph.16	1区水田土層断面（北西から）	17
Ph.17	1区下面遺構全景（南西から）	17
Ph.18	1区大畦畔土留め（西から）	18
Ph.19	1区b・c層出土遺物	20
Ph.20	1-2区護岸（東から）	22
Ph.21	1-2区護岸（北から）	22
Ph.22	1-3区護岸（南西から）	23
Ph.23	1-3区護岸（北西から）	23
Ph.24	1-3区護岸敷物（北東から）	24
Ph.25	1-1区護岸木組み（南東から）	24
Ph.26	1-2区護岸木組み（北東から）	25
Ph.27	1-2区護岸木組み（東から）	25
Ph.28	1-3区護岸木組み（北東から）	26
Ph.29	2区上面（南から）	26
Ph.30	2区下面（南西から）	27
Ph.31	2区出土遺物	27

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区東比恵3丁目1番地他において、福岡地所株式会社より商業ビル建設計画に策定に当たって埋蔵文化財の有無の照会が、平成18年12月18日に埋蔵文化財第1課に提出された事により始まる。申請面積は4,151.35m²、受付番号は18-2-829である。

埋蔵文化財第1課で確認した所、申請地が東比恵3丁目遺跡の範囲内であり、内容など状況を把握するため19年2月1日確認調査を実施し、その結果弥生時代の水田を検出した。

同課では設計変更等での現況での保存が可能か申請者と協議を重ねたが、結果として保存は困難と判断した。そのため遺跡の破壊を伴う建物部分に限定して事前の発掘調査を実施する事となり、調査に関して同社と教育委員会との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成19年5月18日に着手、同年7月28日に全ての工程を終了した。

調査番号	0713	遺跡略号	HGH-2
調査地地籍	博多区東比恵3丁目1番地	分布地図番号	36(博多)2776
開発面積	4,151.35m ²	調査実施面積	910.8m ²
調査期間	070518~070728	事前審査番号	18-2-829

2. 調査の組織

【調査委託】福岡地所株式会社

【調査主体】福岡市教育委員会 教育長 山田裕嗣

【調査総括】文化財部長 矢野三津夫 埋蔵文化財第1課長 山口謙治

調査係長 米倉秀紀

【調査庶務】文化財整備課 鈴木由喜(17年度) 古賀とも子(20年度)

【発掘調査】加藤良彦

【発掘作業】永田豊彦 原田浩 藤村正勝 山中征生 浦伸英 中村尚美 今村由利

北野宏行 近藤英彦 嶋山幸義 濱口長治 米良恵美 元澤慶寛

結城敦雄 永田律子 香月隆 近藤末季 安高邦晴 芦馬光夫

川嶋京子 松尾和子 青木和代 青木真孝 三村悦子 西納富士夫

池田隆 坂下達男 結城フチコ 橋口スミ子

【整理作業】木村厚子 国武真理子 南里三佳

II. 調査区の立地と環境

本遺跡は福岡平野の中央部、御笠川下流右岸自然堤防背面部の低湿地に立地する。調査区は弥生時代中期中頃～後期前半にかけて3面以上の水田面を検出した第1次調査区に道路を挟んで西に隣接する。現地表高は4.4m、遺構検出面はマイナス1.2mの3.2mである。

周辺には本遺跡の北東に榎田遺跡・北に豊遺跡・西に駅東生産遺跡と、同様に後背湿地上の遺跡が展開している。北西に隣接する榎田遺跡では試掘調査の成果から、遺跡範囲内に數ヵ所の微高地が点在し、この微高地上で遺構が確認され、周辺の低地部では多数の足跡が確認され水田遺跡が広がる可能性が高い。これら低湿地遺跡の周辺には比恵那珂遺跡群・吉塚遺跡・堅船遺跡・博多遺跡群等の弥生時代から中世にわたる大きな集落遺跡が分布しているが、これらの遺跡で水田遺構が検出されているのは比恵遺跡第4次調査のみで、この水田も弥生時代前期に属し、規模も小さく存続期間も短い。弥生中期末から後期にかけて遺跡が拡大していく状況下でとても大集落の食料需給を支えられるものではない。以上の状況から、本遺跡を含むこれらの低湿地遺跡は周囲の大集落の食糧需要を支える生産地・水田地帯と目され、殊に本遺跡は時代的状況・位置関係から比恵・那珂遺跡群内の複数の集団によって計画的に拓かれ管理された生産遺跡と考えられている。また、那珂遺跡群の東に位置する那珂君体遺跡も諸岡川と御笠川に挟まれた沖積低位面に立地し、古墳時代前期の広範囲にわたる水田面とこれに伴う大規模な井堰・水路の調査が実施されている。

以上の様に周辺の低湿地遺跡に生産遺跡を想定する状況を裏付ける契機となった本遺跡平成9・10年度実施の第1次調査では、2m程下方の粘質土7,677m²全面に洪水砂で流されながらも弥生時代後期前半の水田面130面以上が検出された。南北・東西方向に直交するように大畦畔が造られ、東西60m程の大区画の中を小畦畔によって長方形から方形の水田に細分する。大畦畔からは両側面に杭を打ち込んだ中に補強材とした建築廃材・木器木製品等を多量に転用して盛土成形している。さらにこの上面水田から50cm程の下面までに度重なる洪水被害を受けながら中期末～後期初頭・中期中頃の水田面が計3面検出されている。中期中頃の初期段階では計画的・規則的な水田区画を行って、一面当たり100m²前後の大規模な水田經營を行っているが、度重なる洪水後の復旧を重ねる毎に、規格性が崩れ地形・実際に沿った23mから105mまでの輻にばらつく棚田状の水田へと改変されていく様が看守されている。

今回の2次調査でも、1次調査区に隣接し平成9年度実施した試掘調査で足跡を検出していることから弥生時代水田が広がる事が想定された。

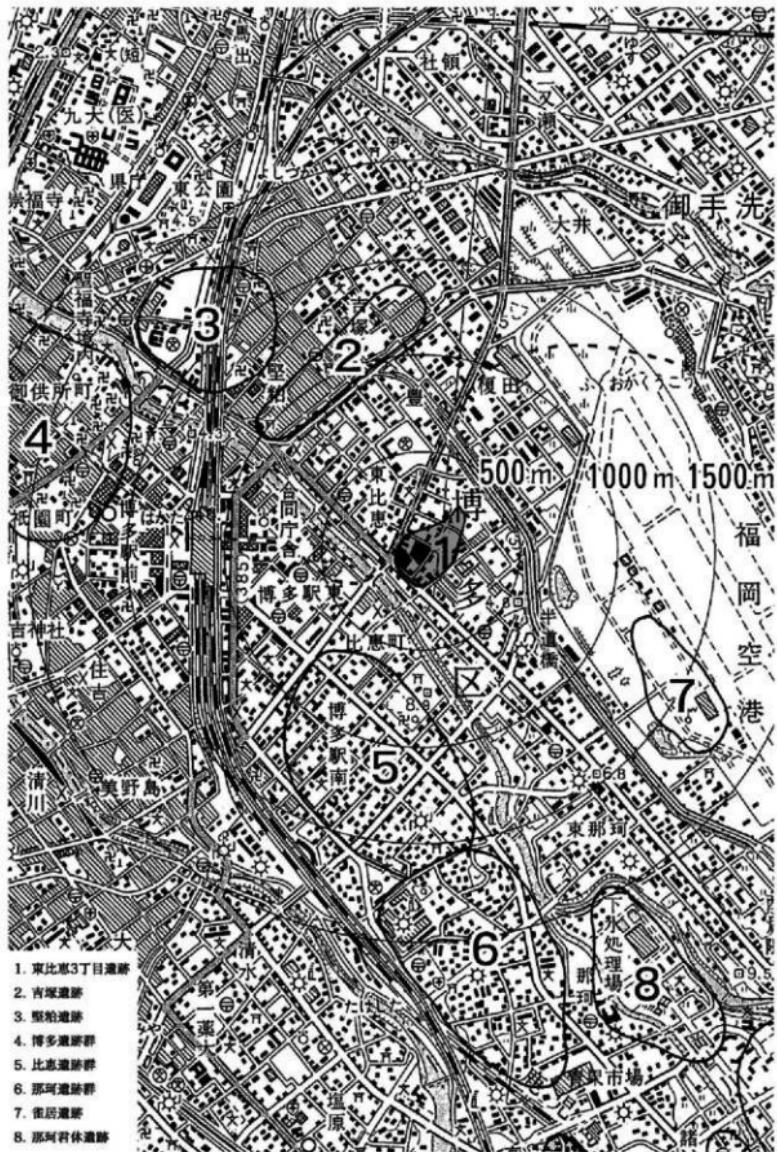


Fig. 1 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

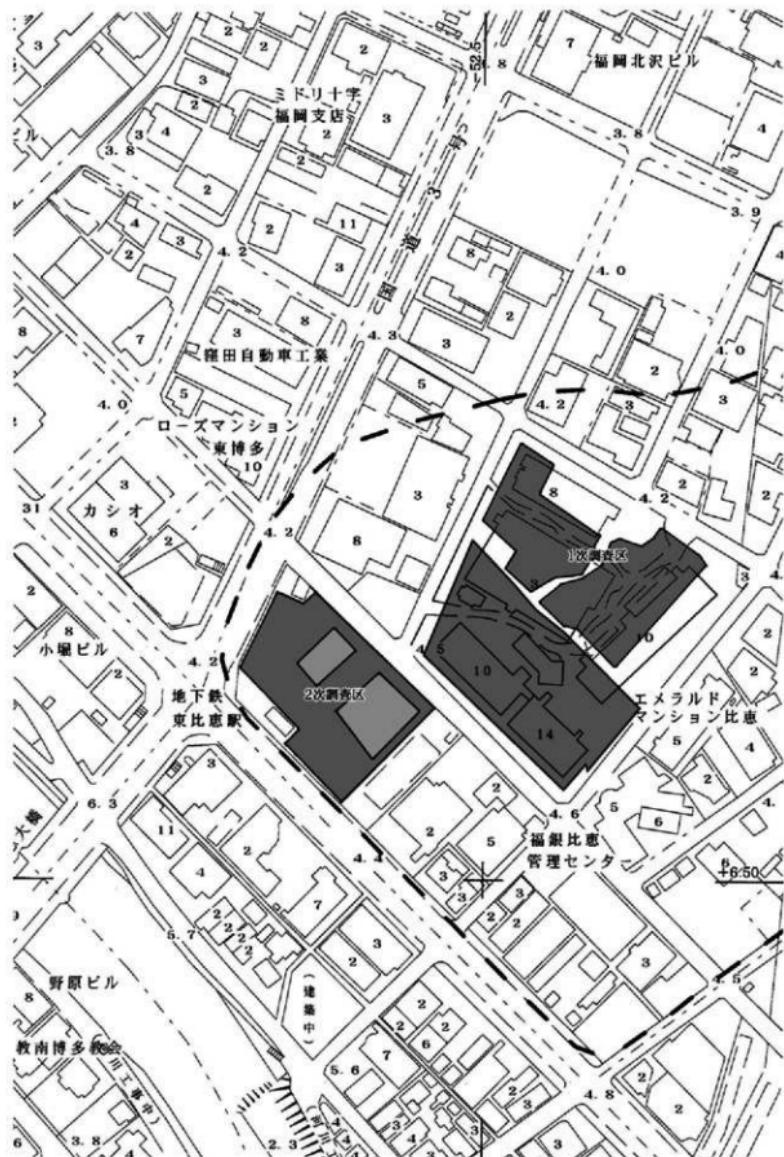


Fig.2 調査区位置図 (1/2,000)

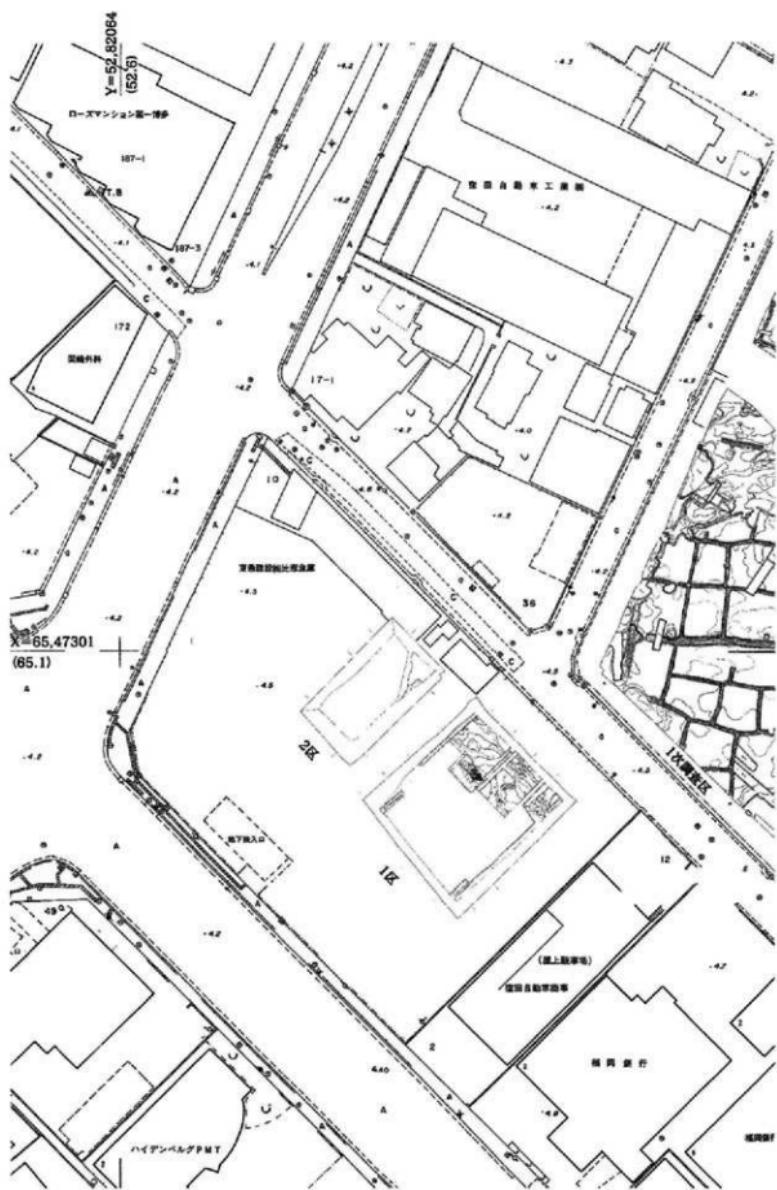


Fig.3 調査区周辺測量図 (1/800)

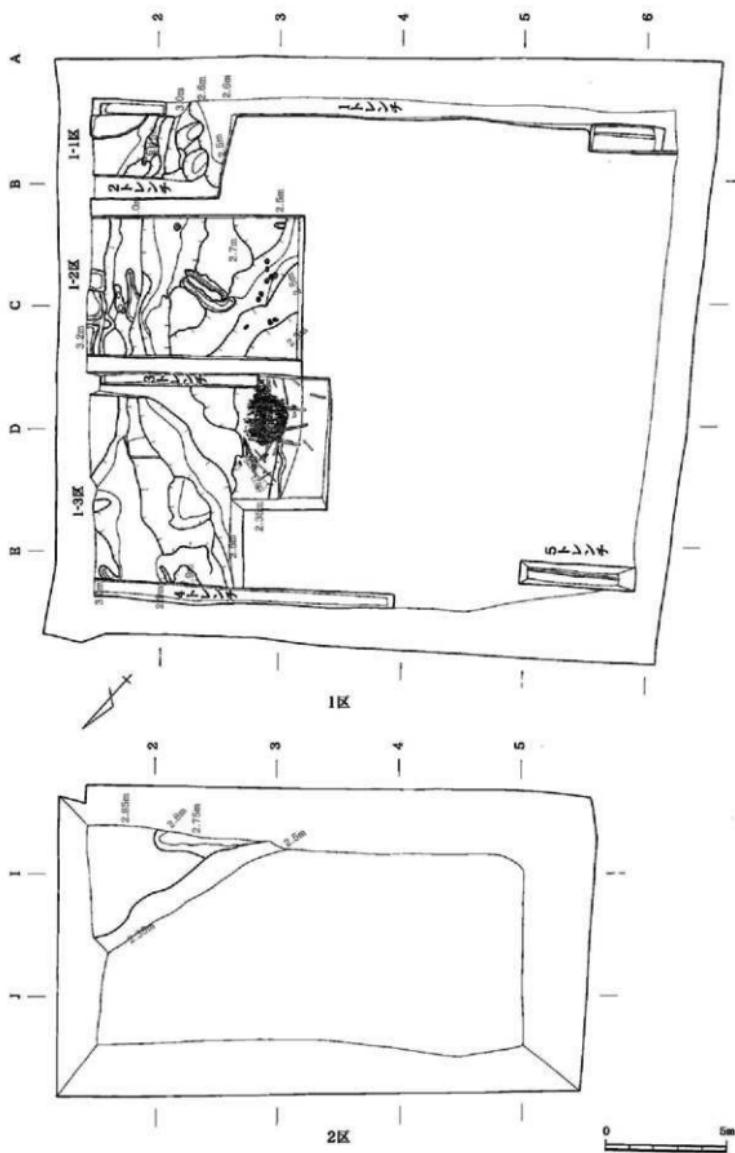


Fig.4 1・2区上面遺構全体図 (1/200)

III. 調査区の記録

1. 調査の概要

本調査区は遺跡の西端部に近く、北東に道路を挟んで第1次調査1区に隣接する（Fig.2）。現地標高は4.4mで1次調査区と同レベルである。（Fig.2・3）。

調査は遺構の破壊される建物部分に限定し、測量基準線は建物の基準線に合わせ、任意で5mグリッドを設定した。ただし、調査着手後使用していたトイレの上下水が調査区を横断していることが判明したため、洪水で遺構の遺存状態が良好ではない範囲であり、また北西部は土壤汚染の改善工事区域となっていたため汚染域と上下水道の間を遺跡の範囲確認のため南東側の調査区と6mほど分断して確認調査を行った。この範囲を調査2区とし南東の調査主体部を調査1区として調査を実施する事とした。調査1区は5月18日より重機による表土剥ぎに着手し、23日まで実施。6月1日より作業員を導入し遺構検出を開始した。この際、検出面の東端部以外が洪水砂に覆われている状態で、下面の遺構残存状態を確認するため調査区の短軸に沿って5本のトレンチを設定し掘削を行った（1～5トレンチ—Fig4・Ph7～9）。結果、西側は深い部分まで洪水砂で削られ遺構が遺存しないことを確認し、調査対象を東部のみに絞り込む事とした。この際、トレンチ横を土層観察ベルトとして残し、1～2トレンチ間を1-1区・2～3トレンチ間を1-2区・3～4トレンチ間を1-3区の小区に分け調査を実施した。表土掘削時に確認した東端部の水田面上と西の洪水砂（上層—SD01）を除去した面を調査上面とし、6月28日に1区上面の全景を撮影、29日より水田耕作土（a層）と下層の洪水堆積層・部分的に残った耕作土（b・c層）を掘削開始し、7月23日1区下面全景を撮影。2区は7月18・19日に表土剥ぎを実施し同23日に上層（SD01）を除去した第1面全景撮影。25日下面を掘削。撮影・測量・実測を完了し、26日より埋め戻しを実施。同28日に調査を完了した。

検出したおもな遺構は上面で12世紀中～後半の調査区全面を覆う洪水跡（SD01）・12世紀前半～中頃の水田面・下面で同期の土留め工事を伴う大畦畔・12世紀初頭～前半の護岸（土堤）で、最下層の腐植土混じりの粘質土（d層）が、古墳時代初頭の可能性を幾分か残す。予測された弥生時代の水田面は全く検出されなかった。

遺物は、二次堆積で縄文中期土器・弥生中期前半～後期・古墳初頭～奈良時代の土師器・須恵器を、d層から古墳時代初頭土師器を少量・a～c層で12世紀初頭～前半の白磁・土師器・瓦器を、上層から12世紀中～後半の貿易陶磁器・土師器・板等コンテナ2箱分検出している。



Ph.1 調査区周辺（1次調査区・南西から）



Ph.2 1区上面全景（南西から）



Ph.3 1-1～3区上面遺構全景（南西から）



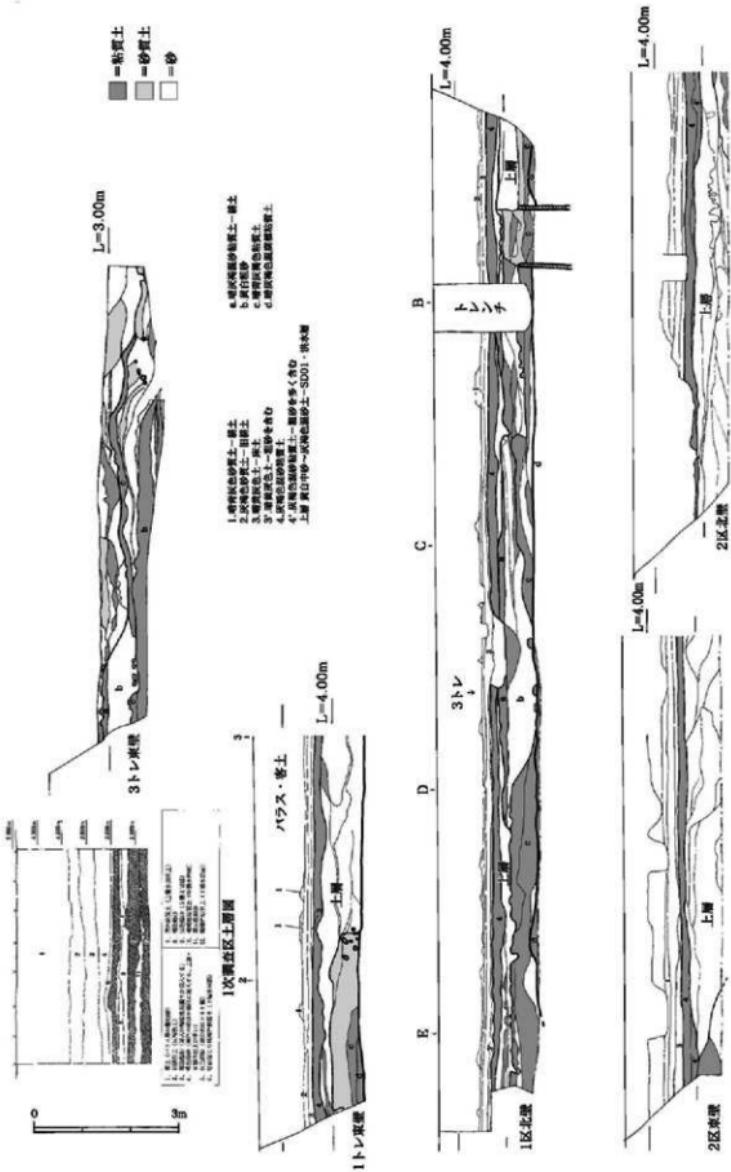
Ph.4 1-1～3区上面遺構全景（北西から）



Ph.5 2区上面遠景（南から）



Ph.6 2区上面全景（南西から）



2. 基本層位

本調査区の土層 (Fig.5 Ph.7～10) は地表から 1m弱のパラス・部分的に残る暗青灰色砂質土の耕土 (1層)・南西部に30cm程広がる赤褐色洪水粗砂・10cm程の灰褐色砂質土の旧耕土 (2層)・15cm程の暗黄灰色土の床土 (3層)・10～25cm程の灰褐色砂質～粘質土 (4層)・20～80cmの黄白中砂～灰褐色砂質土の洪水層 (上層—SD01) で、この洪水砂直下の水田面上を検出面とした。この層からは龍泉窯系碗I類等12世紀中～後半の資料が出土し、この洪水砂を除去した面を調査上面とした。

以下水田耕土の暗灰褐色粘質土 (a層) が1区北東端部の一部に残存。他は全て上層の洪水砂に削られている。この下に60cm程黄白粗砂 (b層) が堆積し、これは1区内を北寄りに流れている。この下に暗青灰褐色粘質土 (c層) が堆積するが大部分をb層が削ってブロック化しており、調査時には洪水層の一部として一緒に掘削した。中央3トレンチの土層断面では護岸の木組みを下底の外端部として幅7m弱高さ60cm程盛土され土堤となっており、内側を水田面とした可能性が高い。しかし1区北西部の一部に残存するのみで、南東部は決壊し打ち込んだ杭の基部が残る。b・c層からは12世紀初頭～前半の瓦器焼等が出土。安定する基盤層は暗灰褐色混腐植土層 (d層) で1区にほぼ均一に広がる。この上面を調査下面として実施した。1-2区の北東部では足跡が多数検出され、水田面か大畦畔土留め工事時に伴う。この30cm程下には砂層が堆積しており、トレンチのd層中から古式土築器の破片が若干検出されるが、これもローリングを受け、時期を示すものであるのか判断が難しい。



Ph.7 1トレンチ東壁土層断面（西から）



Ph.8 3トレンチ東壁土層断面（南から）



Ph.9 5トレンチ（南から）



Ph.10 2区土層断面（南から）

3. 1区の調査

1区は今調査の主体となる部分で、明確な遺構が検出された。

資料的には遺構に伴わない2次堆積で、縄文中期阿高式系土器・弥生中期前半～後期の壺・壺破片・古墳初頭～奈良時代の土師器・須恵器を少量検出している。1次調査区が近いため、弥生中期後半後期前半の土器が目立つ。

古墳時代の遺物として特筆するものに土製鏡模造品がある。これは河川岸近くで石製模造品と共に祭祀遺物として出土する資料である。

明確な遺構は下から、12世紀初頭～前半期の木組み護岸で、殆どが洪水で削られ露出するか流されており、北東部1-3区の一部に幅7m弱高さ60cm程盛土された土堤として残っている。上面では1-1～1-3区北東端部で検出された水田面と大畦畔の土留め工事で、12世紀前半～中頃と考えられる。これも12世紀中～後半には大規模な洪水で流されている。

1). 縄文・弥生時代の調査

前述したように当初の予想からおおきくはずれ、弥生時代の水田面は全く検出されず、遺構は遺存していない。遺構から避難した2次堆積で少量の土器が出土する。

出土遺物 (Fig.6 Ph.7)

1・2は縄文中期阿高式系土器でともに底部片。1は径10cm。外底は上げ底で滑石・赤褐色粒を多く含む。調整不明。鈍い黄橙～橙色。2は平底で滑石を多く含む。調整不明。暗赤褐色。3～13は弥生土器。3は金海式系の壺口縁。口縁内面と口唇外面に刻目を施す。鈍い橙色。4は丹塗磨研の無頸壺。口径10.4cm。丹塗りは殆ど剥がれる。5・6は鋸先口縁壺。5は口径33.8cm。6は24.6cmを測る。7は袋状口縁壺。口径13cm。丹塗りは剥がれる。8～10は中期壺。8は口径25.0cm。9は33.0cm。11～13は後期～終末期壺。11は口径17cm。12は35cm。13は31cmを測る。



Ph.11 1区弥生時代遺物

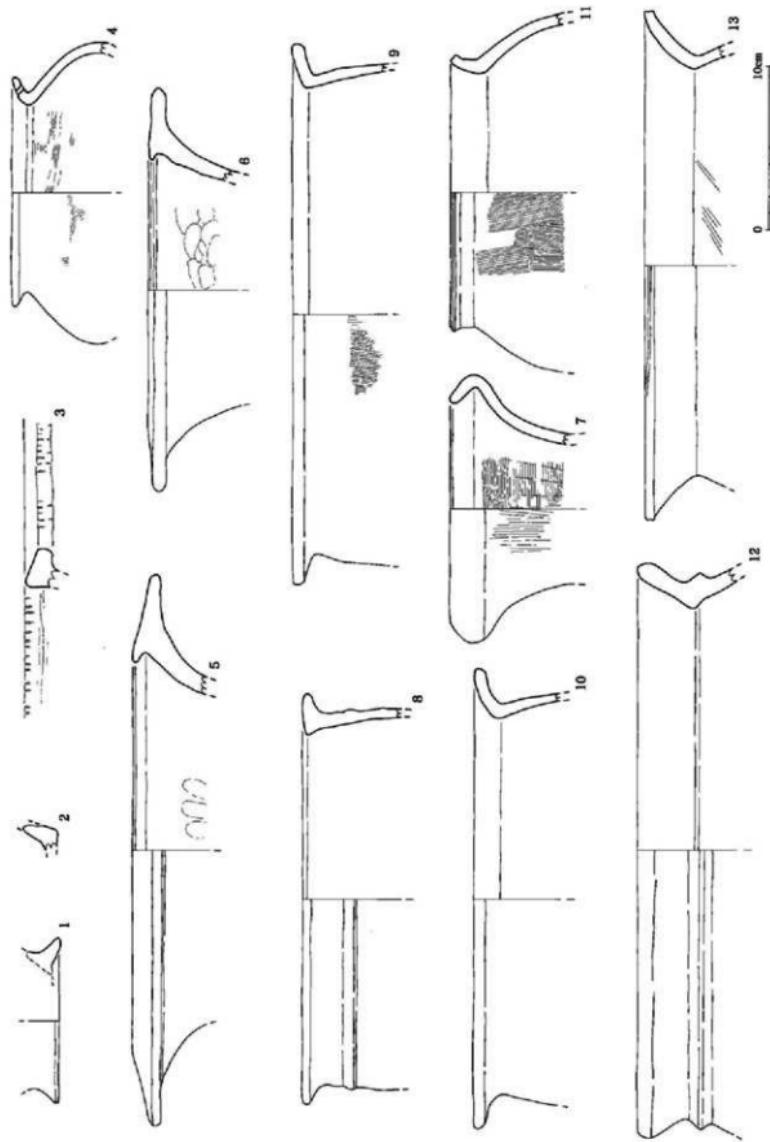


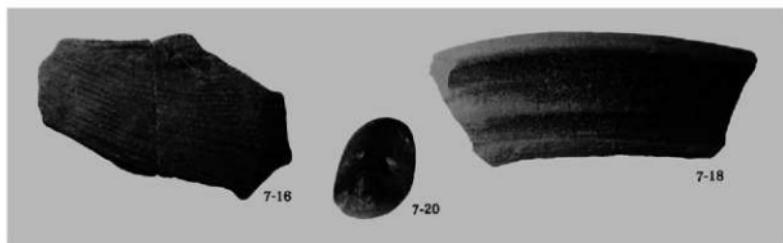
Fig. 6 1区编文·弥生时代遗物类测图 (1/3)

2). 古墳時代・古代の調査

古墳時代・古代も同様に遺構は遺存せず、遊離した2次堆積で少量の土器が出土するが、いずれの遺物も摩滅する。。

出土遺物 (Fig.7 Ph.12)

14・15はd層出土の古式土師器で器壁が薄い。14は口唇を面取りする。鈍い黄橙～黒褐色。15は口唇は丸く仕上げ外面灰黄色内面鈍い黄橙色。ともに摩滅しd層の時期を示す資料とするには判断が難しい。16は庄内式系の壺肩部片。左上がりの細筋タタキで内面副上位から下に右上がりのケズリを施す。外面明黄褐色内面鈍い黄橙色。17は土師器壺。口径11.6cm。外面灰黄色内面鈍い黄橙色。18は須恵器壺。口径22cm。灰色。19は8世紀後半須恵器坏蓋。口径17cm。灰色。20は土製鏡模造品。3.5×2.3×1.4cmを測る。土師質でナデと指頭圧で成形し、上面をつまみ上げ中央に焼成前の径3mmの穿孔を施す。鏡面は凸面。上面黒灰色下面鈍い黄橙色を呈す。5世紀代に石製鏡模造品とともに川辺での祭祀に用いられる祭祀遺物であり、神鏡めで用いたか。本調査区にも該当する。



Ph.12 1区古墳時代遺物

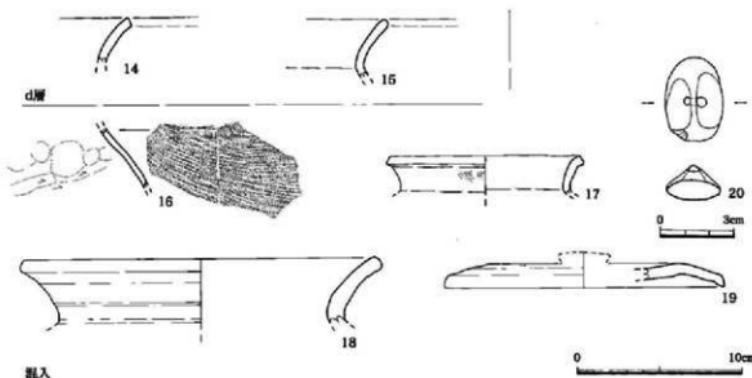


Fig.7 1区古墳時代・古代遺物実測図 (1/3・20=1/2)

3). 中世の調査

明確な遺構が検出されており、水田関連遺構で今調査の中心を成す。

上面ではI-1・1-2区北東端部で検出された水田小畦畔と田面(a層)の一部・大畦畔の土留め工事がある。12世紀前半～中頃と考えられ、調査区全面を覆う同中頃～後半の洪水(上層—SD01)で田面の殆どが流失する。

この田面下の洪水砂(b層)・耕耘ブロック(c層)下から、河川(御笠川)に並行する12世紀初頭～前半期の護岸木組みの一部が検出された、殆どが洪水で削られ(b層)露出するか流されており、北東部1-3区の一部の残存から本来は幅7m高さ60cm程に盛土された土堤で、その下底部外側の補強・根がらみとして組まれたものと考えられる。

①上層(SD01)の調査(Fig.4 Ph.13)

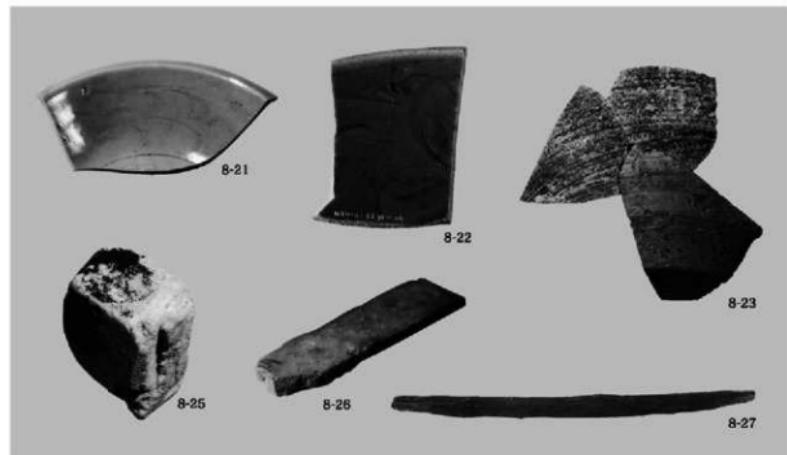
調査区全面を覆う大規模な洪水砂で、20～80cm程の厚さで灰褐色砂質土・シルトを巻き込む黄白中砂の洪水層。南東から北西に流れ、一部中央部から北に分流する。北西側の2区では1m近く掘り下げても下面が露出しない程厚く堆積する。12世紀中頃の水田面を壊滅させており、上層の灰褐色砂質～粘質土(4層)が厚く堆積するまでは開墾を放棄させている。

出土遺物(Fig.8 Ph.14)21は白磁V類碗。口径14.4cmで内面に柳描き波紋を描く。灰白色の透明釉を内外に施釉する。外面にはピンホールが多くあく。胎灰白色。黒色粒を含む。22は龍泉窯系青磁I類碗。口径16.0cmで内面口縁の沈線下に柳描き波紋と片切彫りで劃花文を描く。釉はオーリーブ灰色半透明で内外に施釉する。胎灰白色。23は中国褐釉陶器鉢。底径10.0cm。内面と外面底部脇まで暗褐色不透明釉を施釉する。胎土赤色。24は土師器丸底杯で口径15.2cm。内外回転ナデ。浅黄褐色を呈す。25は石錠I類取手部の方柱状の再加工品。8×5.1×4.3cm。上部を欠損し外面に煤が遺存する。26は泥岩の仕上げ砥石で節理面から剥離する。底面は上面のみ。両側は敲打で平滑に調整。現況で15.5×4×0.9cm。27は針葉樹削材の矢板で117.2×6.8×3.6cm。先端から17cm程3面から剣をたてる。上位には枝打ち痕がある。

以上12世紀中頃～後半の時期を示す。



Ph.13 1区洪水砂面(SD01・南西から)



Ph.14 1区上層 (SD01) 出土遺物

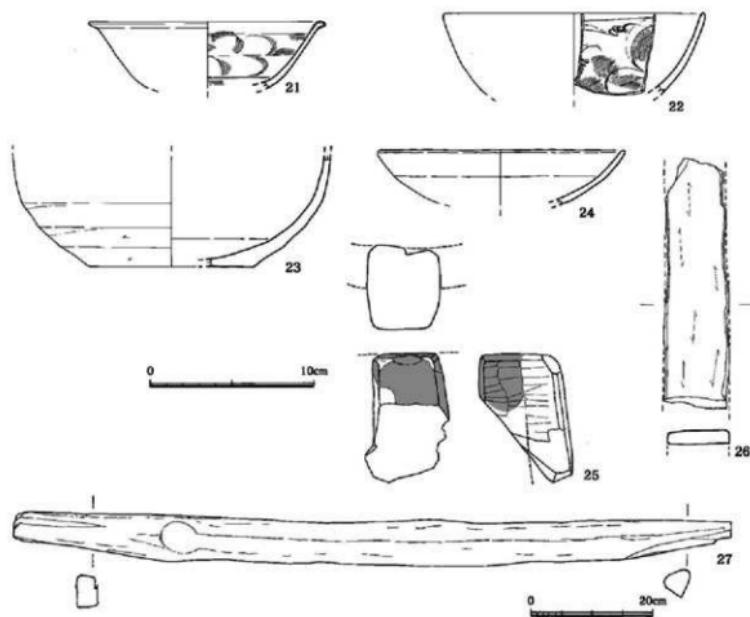
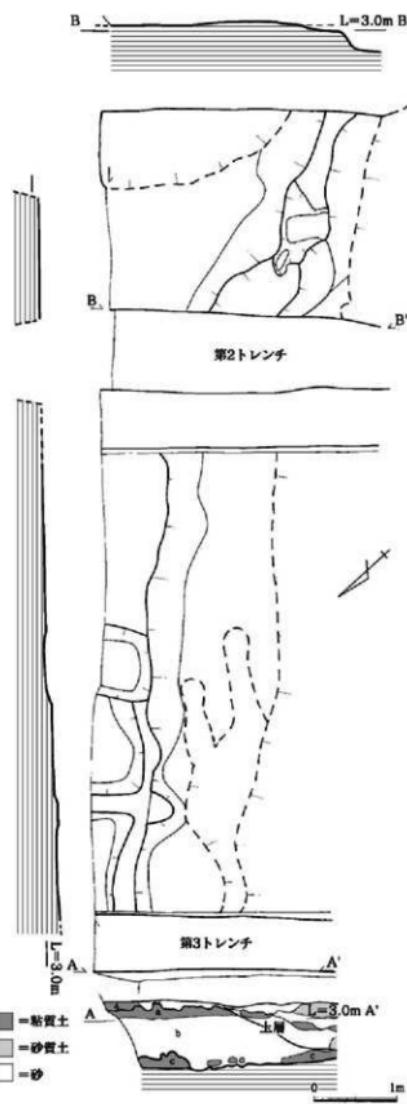


Fig.8 1区上層 (SD01) 出土遺物実測図 (1/3・27-1/8)



②上面の調査 (Fig.4 Ph.13)

遺構検出面上面では1-1・1-2区北東端部で検出された水田小畦畔と田面（a層）の一部・大畦畔の土留め工事がある。12世紀前半～中頃と考えられ、同中頃～後半の洪水（上層一SD01）で田面の殆どを流失する。

1. 水田面 (Fig.9 Ph.15・16)

今回の調査で最初に検出された遺構で、当初1次調査区から広がる弥生時代の水田面と考えたが、暗灰褐色混砂粘質土（a層）田面下の洪水層（b層）から12世紀初頭～前半の遺物が検出され、これ以降・上層の12世紀中頃以前の水田面であることが確かめられた。

洪水砂による削平で遺存状態は極めて悪く調査1-1・1-2区と1-3区の一部延べ15m・幅1～2m程がかろうじて遺存する。下底で幅0.5～1m弱・高さ10cm弱残る小畦畔十字交差部分から少なくとも4面の水田面が確認される。田面は北西部2面が底面高約13.15mで、右回りに北東部3.10m南西部3.05mと下がる。1次調査の上面弥生後期前半の田面より25cmほど高く、畦の方向もN-45°→Wの現街区にはほぼ並行し、弥生期の畦とも方向は異なり、これより43°南に振れる。南東側の畦は1-1区で南に若干湾曲し大畦畔に重なる。地形に沿ったものと考えられる。

1次調査区の標高3.80m付近の耕作土は中世末～近世と考えられており、今調査でこれに対応するのは1・2層土で、1次調査区より底面が20cm程下がる (Fig.5)。中世まで同間隔であるとすれば標高3.3m当たりの3層褐色粗砂層下面に中世水田面の底面が該当するか。1次調査区上層水田埋没後の粗砂層は数回の氾濫が確認され、また、3層中には挿入の暗褐色粘質土混入が確認されており、以上の状況から推測して、1次調査区では本調査区より上層洪水砂の削平が著しく、田面を根こそぎ流し去り、その残土がブロックとなって3層中に混在すると思われる。

Fig.9 1区上面水田実測図 (1/60)



Ph.15 1区水田面（南東から）



Ph.16 1区水田土層断面（北西から）

③ 下面の調査



Ph.17 1区下面遺構全景（南西から）

③下面の調査 (Fig.10 Ph.17)
水田耕作土a層下から大畦畔の杭列と、横木組の土留め工事とさらに下層の洪水砂（b層）・耕土ブロック（c層）下から、河川（御笠川）に並行する12世紀初頭～前半期の護岸木組みの一部が検出された。大畦畔の杭列と横木組の土留め工事は上面の水田開墾に伴うものであるが、上面では洪水砂に大畦畔の盛土が削平され田面と平行か下がる程になつておりトレンチに横木の一部がかかつたものの上面遺構検出時には全く確認できず、下面に向けての掘削中に確認されたものである。

護岸木組みは上面検出時に、1-3区の南西落ち際で一部露出していたが、殆どは下面の堆積土下であった。下面遺構検出でも洪水で削られ（b層）露出するか流されている。

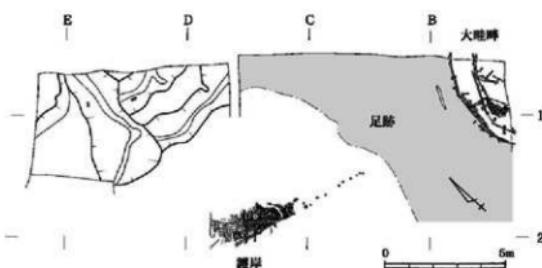


Fig.10 1区下面遺構全体図 (1/200)

1). 大畦畔 (Fig.11 Ph.18)

1-1区で水田耕土 (a層) 除去作業中に検出され、田面に伴うものである。調査区東隅で西に弧を描いて湾曲し、北東側で1.05m南西側で0.5mと幅が半減する。径5~10cm前後・長さ1.2m以上の棒杭・削材杭を0.5~1.5m間隔で70~80cm以上打ち込み、これの内側に長さ1.5~2.5m径5cm前後の枝を払った広葉樹の細木を3~5段高さ30cm程に重ね置く。土層観察から (Fig. 5) 、幅1.2m・深さ40cm程トレンチ状に洪水砂 (b層) を掘り抜き、外側に杭を打ち込んで内側に横木を重ね

下底部を補強し砂質土に入れ替え地盤改良して大畦畔全体を強化している。杭・横木は耕作の妨げにならないようになか田面下30cm程で止めている。田面以上の大畦畔は洪水砂 (上層) に削られ、東側はさらに40cm程下方まで削平されているが浸食をここで防ぎ、成果をあげている。

出土遺物 (Fig.12)

28~30は土器器。28は塊か壊。灰白~灰黄色。29は塊で口径16.0cm。外面回転ナデ内面ヨコケンマ。灰黄色。30はヘラ切り皿。口径9.1cm高1.1cm。鈍い橙色。



Ph.18 1区大畦畔土留め (西から)

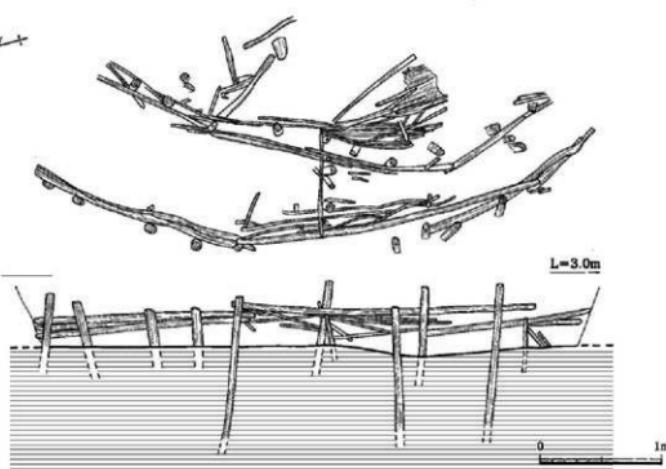


Fig.11 1区大畦畔実測図 (1/40)

2). b・c層出土遺物 (Fig.19 Ph.19)

田面下の洪水砂層（b層）と護岸木組み上の旧耕作土と思われる暗青灰褐色粘質土（c層）出土遺物で、31・32は白磁碗。31はV類。32はIV類。33は土師器皿。口径9器高0.9cm。内外回転ナテ。灰白～浅黄橙色。34～37は瓦器塊。34は口径16.8器高5.4cm。口縁内外回転ナテ。以下にヨコケンマ。淡灰色。口縁が黒変。35は口径15.0cm。外面口縁内面は回転ナテ。灰色で口縁が黒変。36は底径6.8cm。内外ヨコケンマ。灰黄色。37は口径15.2cm。内外ケンマ。灰白色で口縁が黒変。38は細粒砂岩の仕上砥。39は角材で61.6×2.1×0.7cm。40は根据りか。23.4×3×1cm。ヘラ状で先端

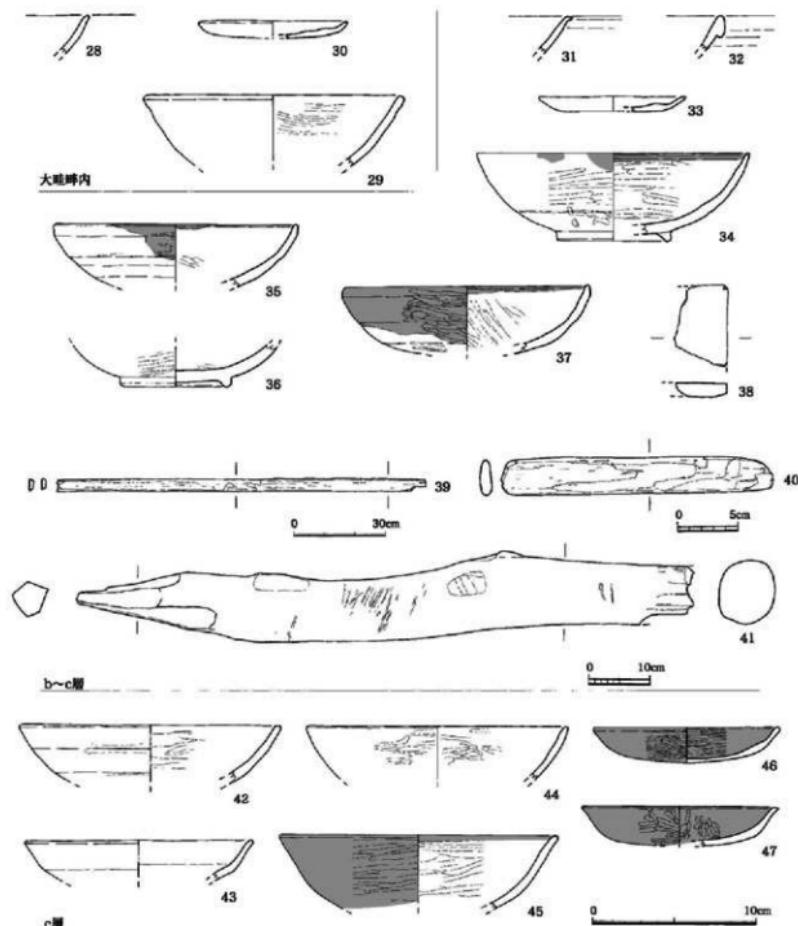


Fig.12 1区b・c層出土遺物実測図 (1/3・40=1/4・39=1/16・41=1/8)



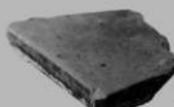
12-32



12-34



12-37



12-38



12-39



12-40



12-41



12-45



12-46

Ph.19 1区b・c層出土遺物



Fig.13 1区護岸実測図 (1/60)



Ph.20 1-2区護岸（東から）



Ph.21 1-2区護岸（北から）



Ph.22 1-3区護岸 (南西から)



Ph.23 1-3区護岸 (北西から)



Ph.24 1-3区護岸敷物（北東から）



Ph.25 1-1区護岸木組み（南東から）



Ph.26 1-2区護岸木組み（北東から）



Ph.27 1-2区護岸木組み（東から）

を薄く断面は緩く湾曲する。41は丸太杭で $101 \times 12.5 \times 9$ cm。先端22cm程を5面にケズリ剣をたてる。42・43は丸底底。42は口径16cm。灰白色。43は口径14cm。鈍い黄橙色。44は土師器塊。口径16cm。淡黄色。45~47は瓦器。45は塊。口径17cm。灰白色。外面~口縁内面は黒色。46・47は皿。46は口径11.5cm高2.2cm。黒(銀化)~灰白色。47は口径12cm高2.4cm。黒色。12世紀初頭~前半。

護岸(土堤) (Fig.13 Ph.20~28)

田面下の拱水砂(b層)・耕土ブロック(c層)下から検出された、河川(御笠川)に並行する12世紀初頭~前半期の護岸木組みで、大畦畔の直交方向に間を5m空け、河川の岸に沿って延べ11m・幅1.5m程を検出した。河川側に弧を描いて緩く湾曲する。1-2区・1-3区間に幅5m深さ50cm程の浅い窪地があり、これを横切りこの部分を補強するよう構築される。窪地中央から南東側(1-2区)と北西側(1-3区)で工法が異なり、南東側では岸に沿って径5cmから10cmの杭を一直線に1m以上打ち込み、30cm程盛土をして上面に長さ1m弱の葦茎を葦状にした粗朶を敷き詰め杭の内側に横木を2段程積む。この内側60cmの位置に河川側から斜めに1m弱の杭を斜めに打ち込みこの杭の内側に4~5段横木を重ねる。北西側では簡略化し、長さ2.5m径10cm程の枝を払った広葉樹小木の横木を斜めに50~70cm間隔で敷ききこの上に横木・さらに小枝を縦に格子状に置き葦茎を葦状にした粗朶を敷き詰める。組み木部・粗朶ともに繋縫した縄・糸の類は検出されていない。3トレント土層断面(Fig.5 Ph.8)観察から、本来は幅7m弱高さ60cm程窪地を埋めるように盛土された土堤で、その下底部外側の補強・根がらみとして組まれたものと考えられる。



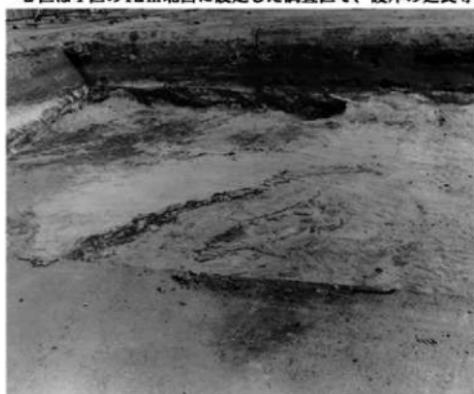
Ph.28 1-3区護岸木組み(北東から)



Ph.29 2区上面(南から)

4. 2区の調査

2区は1区の12m北西に設定した調査区で、護岸の延長等、遺構の遺存状態確認のため設定した。



Ph.30 2区下面（南西から）

結果としては、上層の洪水砂がさらに厚く堆積し1m以上掘削しても底面が検出されない状況で、北に流れを変え、この内側の東隅にd層が延びているのを確認できただけで遺構は検出できなかった。

上層出土遺物 (Fig.14 Ph.31)

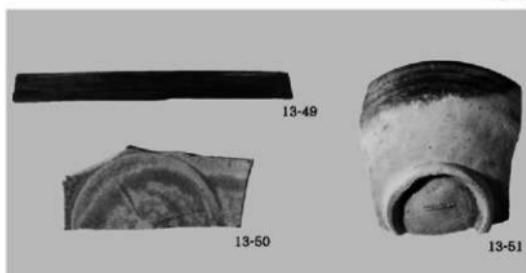
48・49は上層 (SD01) 出土。48は土師器高台皿で底径5.8cm。鈍い黄橙色。49は針葉樹の胚目薄板材。21.2×2.9×0.3cm。

下層出土遺物 (Fig.14 Ph.31)

50・51は下層b・c層出土。50は白磁平底皿0-1類。釉は灰白～浅黄色半濁で内面から外面底部脇まで施す。胎

灰白色内底に十字の線描文。51は瓦器椀。口径16.2器高7cm。外面口縁にヨコナヌとケンマ以下にヨコヘラナヌ。外底に板圧痕。内面ヨコケンマ。淡灰色で口縁内外が黒変。

以上12世紀初頭から前半を示す。



Ph.31 2区出土遺物

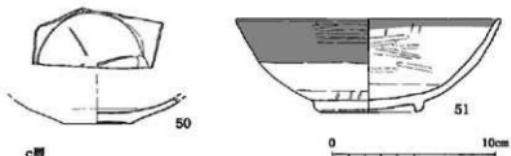
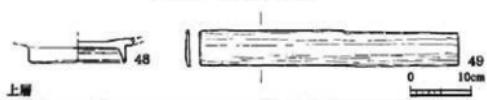


Fig.14 2区出土遺物実測図 (1/3・49=1/8)

IV. 小結

今回の調査では隣接する1次調査区とは全く異なる調査結果となり、東比恵3丁目遺跡の西隅を明らかとした。1次調査区では弥生中期中頃から後期前半にわたる3面以上の大規模な水田遺構が検出されたが、本調査区では2次堆積の同期の資料は散見されるものの、弥生時代の遺構は皆無であった。御笠川により近く、同期は御笠川の氾濫原内である事が判明した。1区最下層の耕作土層の可能性も考えられるd層からは古式土器の小片が2点検出されたが、これもローリングを受けており、時期を確定するには不明瞭である。

明確な遺構は中世のみで、下から、御笠川に沿って浅い窪地を横断した12世紀初頭～前半の護岸木組み遺構（土堤）で、11m程の長さにわたって検出した。幅7m高さ60cm程の土堤であった可能性が高いが、大部分を後代の洪水で（b層）流失する。また、護岸北西部の工法は下月限C遺跡7次調査で検出された護岸遺構SX773と非常に似通っている。時期は8世紀中頃～後半で350年程の乖離があるが、報文中で「屏風返し」としてこの工法を紹介した「地方凡例録」は寛政3年（1791）頃の起稿とされ、1000年以上にわたって守り伝えられた水防の工法であったことが知られる。

上面では12世紀前半～中頃の御笠川に沿った（現街区）水田の南西限部を検出した。これには土壤改良と木組み補強を施した大畦畔が伴う。12世紀中頃～後半には調査区全面を覆う大洪水（上層～SD01）で殆ど削平され、レベル的には1次調査区3層粗砂層に対応すると考えられ、粘質土ブロックを多く混入することから、1次調査区ではより激しい洪水量で中世水田面を根こそぎ削平されたものと考えられる。

参照文献：「東比恵3丁目遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第636集2000

「下月限C遺跡VI」福岡市埋蔵文化財調査報告書第881集2006

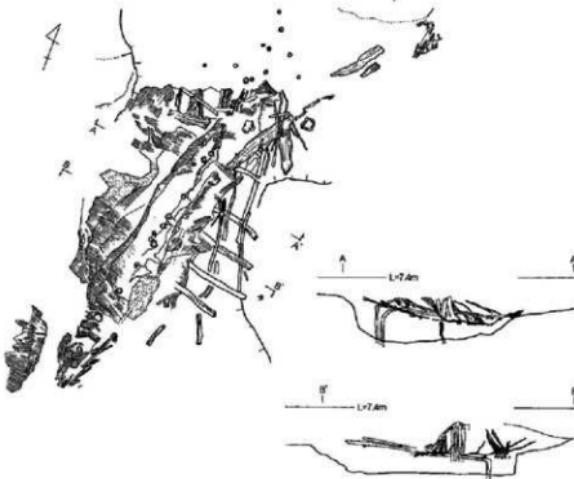


Fig.15 下月限C遺跡7次調査護岸SX773 (1/60)

- 報告書抄録 -

ふりがな	ひがしひえ							
書名	東比恵三丁目遺跡2							
圖書名	東比恵三丁目遺跡第2次調査報告							
巻次	2							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	1051							
編著者名	加藤良彦							
発行機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1-8-1 ☎092-711-4667							
発行年月日	20090331							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所取遺跡名	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
東比恵三丁目 遺跡 第2次	福岡市博多区 東比恵3丁目 1番外	市町村 遺跡番号	40132	2776	33° 35' 10"	130° 25' 27"	20070518~ 20070728	910.8 商業ビル 建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
東比恵三丁目	水田	中世	水田・ 護岸	赤生土器・須 恵器・土師器・ 土製模造鏡・ 瓦器・貿易陶 磁器	12世紀前半～中頃の水田と12世紀初頭 ～前半の護岸工事			

東比恵三丁目遺跡第2次調査報告

東比恵三丁目遺跡2

-福岡市埋蔵文化財調査報告書第1051集-

2009年(平成21年)3月31日

発行 福岡市教育委員会

〒810-0001 福岡市中央区天神1丁目8-1

☎ 092(711)4667

印刷 西福岡印刷所

福岡市西区勝利6丁目9-27